

勉強法の習得は学習意欲を高めるか

森 敏 昭

「今、学校は変わろうとしているが、その鍵を握っているのは教師の意識改革である。新鮮な知的刺激によって、自分の頭で考えることのできる教師が一人でも増えることを願わずにはおられないが……（以下略）」

これは、今の学校を蘇らせるためには教師の意識改革が不可欠であると説く、ある著名な教育心理学者の言葉である。「新しい学力観」に基づいて学校を改革することの必要性が叫ばれている今日、教育に携わる者は皆、この言葉の深い含蓄を噛みしめてみる必要があるのではないだろうか……。ふと、そんな自戒の念にかられてしまったのであるが、そのことについて書き始めると、すぐにも紙面が尽きてしまいそうなので、取り急ぎ私に与えられたテーマを

片付けておくことにしよう。

学習方法の習得と学習意欲

「勉強法を工夫し、内容や個性に合った能率的な方法を手につけることは、学習意欲を高め、勉強好きな子どもへと結びつくでしょうか？」

これが私に与えられたテーマである。私の結論を先に述べると、条件つきで「YES」である。つまり、勉強法（学習方法）を身につけることが学習活動を促進するため、三つの条件とうまく結びつけば「YES」、そうでなければ「NO」ということである。では、その三つの条件とはいったい何なのだろうか。それは、私の考えでは次の三

つである。

すなわち、第一に学ぶことの楽しさや目標を達成することの喜びを知ること、第二に明確な目標を持つこと、第三に自分も頑張れば目標に到達することができるのだという自信を持つことの三つである。このことを飛行機の飛行の原理になぞらえて、もう少し詳しく説明してみることにする。

生涯学習へのテイクオフ

飛行機が空を飛ぶためには、まず第一に動力が必要である。プロペラやジェットエンジンによって機体を高速で前方へ推進させる力が働かなければ、飛行機は飛翔力を得ることができないからである。ちょうどこれと同様に、学習活動の場合にも、子どもを積極的に学習活動へと取り組ませるための推進力が必要であり、そのような推進力の働きをするのが、知的好奇心や達成動機である。難し過ぎてわからないと思っていた算数の文章題が自分の力で解けたときの喜び。それまでどうしてもできなかった逆上がりが初めてできたときの言い知れぬ充実感。こうした内発的動機づけこそが、生徒を次なる学習活動に取り組ませるための原動力になるのである。

ところで、エンジンを動かすには燃料（バッテリー）が必要である。航空機の場合には整備士が給油してくれるが、人間の場合はどうだろうか。親や教師が賞罰や競争などの外発的動機づけによって給油（充電）してくれることもあるが、いつまでもそれに頼っているわけにはいかないだろう。だから、生涯学習という長い航路を燃料切れで墜落しないためには、できるだけ早いうちに自己給油（充電）装置を作動させる必要がある。では、どうすればその自己給油装置が作動し始めるのであろうか。それは、言うまでもなく、学ぶことの楽しさや喜びを知ることである。新しい知識を獲得することは視野（視界）が広がる楽しい体験である。新たな技能を身につけることは、自分自身が向上している（上昇している）ことを確認できる嬉しい体験でもある。

このように、本来、学ぶことは空を飛ぶのと同じくらいに楽しく嬉しい体験のはずである。ところが、学ぶことはいつしか「苦行」になり、学校はそのための「修行の場」になってしまったようである。学ぶことを「勉強（強いて勉める）」という言葉で表すことが何よりの証拠である。学校を辛い「修行の場」から楽しい「学びの場」へと変革することが、自己給油装置を作動させるための必須の条件

なのではないだろうか。

飛行機が空を飛ぶための第二の条件はうまく気流に乗ることである。そのためには、機体を滑走路に正しく誘導し、水平尾翼を適切な角度に調整する必要がある。そうしなければ、飛翔に必要なスピードを得ることも気流に乗って飛翔力を得ることも不可能だからである。学習活動の場合も、原理はこれと同様である。

つまり、義務教育が滑走路であり、この期間は適切な目標に向かってゆっくりスタートし、次第に加速していくのがスムーズに離陸するための秘訣である。最初は能力に不相应な高すぎる目標を立てないことである。あせって急上昇すると、失速して墜落してしまう恐れがあるからである。かといって、あまりに目標が低すぎたのでは、離陸する前に滑走路が終わってしまうことにもなりかねない。適切な水準の最終目標を立て、それへとつながる下位目標を一步一步クリアしながら着実に学習活動を進めていくことが大切なのである。そうすれば、知らず知らずのうちに自己教育が身につく、生涯学習の航路へとスムーズに離陸(テイクオフ)できるはずである。

飛行機が空を飛ぶための第三の条件は、軽くて強靱な機体を作ることである。たとえば高性能のエンジンを搭載した

飛行機が滑走路を順調に加速していったとしても、もし機体が風圧に耐えるだけの強靱さを備えていなければ、必ず空中分解して墜落してしまうことであろう。考えてみれば、金属でできた物体が重力に逆らって空を飛ぶのである。これはまさに奇跡と呼ぶべきであるが、そんな奇跡を可能にしたのが、ジュラルミンという軽くて強靱な合金の発明である。飛行機が空を飛ぶためには高速度で機体を前方に推進させる必要がある、そのことによって機体を受け取る風圧の強烈さは測り知れない。そんな強烈な風圧に長時間さらされてもビクともしないだけの軽くて強靱な合金の発明がなかったならば、超音速で空を飛ぶという人類の長年の夢がかなえられる日がやってくることは、決してなかったことであろう。

変動きわまりない複雑な現代社会において「生涯学習」を続けることも、おそらくそれと同じくらいに困難な道程である。決していつも順風満帆というわけにはいかないはずである。ときには乱気流に巻き込まれて墜落しそうになることもあるに違いない。そんなときに大切になるのが、困難に負けない強靱な精神力であり、自分には試練を乗り越える力があるのだと自分自身を信じていることのできる、よい意味での自尊心なのである。

学習方法の習得と自己教育力

さて、以上のたとえを用いるならば、今月号のテーマである「勉強法」は、さしずめ飛行機の操縦技術であろう。

パイロットに確実な操縦技術を習得させることは、安全な航行を保証するための最も大切な条件の一つである。だから、航空会社は多くの時間と労力を費やして、パイロットの飛行訓練を組織的・体系的に行っているはずである。しかも、その訓練のカリキュラムはかなりハードであるに違いない。それにもかかわらずパイロットがそのハードな訓練をやり遂げることができるのは、確かな操縦技術を習得できるかどうかは自分の命が（もちろん乗客の命も）かかっているからである。

さらに、パイロットの訓練では、実技訓練が重視される。つまり、前述した飛行機が飛ぶための三つの原理が、実際の飛行訓練の中で体験的に学習される。このため、自分の身につけた操縦技術が実際にどのように役立つのかを訓練の過程で即座に確認することができるのである。

学校の勉強の場合も、理屈はこれと同じであろう。つまり、確かな学習方法を身につけることは、（命に関わるとは言わないまでも）自分の人生にとって重要なことなのだ

と実感できることが大切なのである。そのような実感を持つことができれば、生徒は確かな学習方法を身につけようと意欲的に学習活動に取り組むに違いない。また、適切な学習方法の習得が実際に学習成果を上げることにつながるのだということを確認できれば、もっと効果的な学習方法はないのだろうか、さらに工夫をすることでであろう。

ところが学校教育においては、パイロットの訓練の場合とは異なって、学習方法の組織的・体系的な指導がなされていないという話はあまり聞かない。恐らく学校教育では、各学年の教育目標として定められている知識なり技術なりを習得させることに主眼がおかれているからであろう。本来であれば学校教育においても学習方法や学習スキルを習得させることが重要な教育目標とされるべきなのであるが、一斉授業という学習形態において、しかも一定の時間内に一定の内容を効率よく教えることが求められる今の学校では、そこまで手が回らないというのが現状なのである。

しかし、生涯学習において生きてくるのは、決して身につけた知識や技術の量ではない。それよりはむしろ、学習のプロセスで知らず知らずのうちに習得される学習方法や学習スキルの方が重要である。なぜなら、前述したよう

に、生涯学習は自己教育力に基づく学習であり、自己教育力は自分自身で計画を立て工夫しながら学習することを通じて、学習方法や学習スキルを習得することに他ならないからである。つまり、独力で学習するという経験を通じて効果的な学習方法や学習スキルを習得し、それを繰り返して用いることによって自己学習の習慣を形成することが、将来の生涯学習において生きてくるのである。

効果的な学習方法の具体例を少しだけ挙げてみることにしよう。

例えば、知識の習得が中心となる学習領域では、①機械的に丸暗記するのではなく学習材料の意味をよく理解すること、②学習中に自分自身で教材の重要な部分を思い出し、暗唱(復唱)しながら覚えること、③知識を羅列的に覚えるのではなく、関連のある項目同士をまとめて整理し、体系つけて覚えること、学習材料の要点をノートに整理すること、などが効果的な学習方法になるであろう。

また、推論や論理操作を必要とする学習領域では、思考の過程を言語化したり、図式化したり、あるいは身近な具体例に置き換えて考えてみるのが、筋道を立てて物事を考える習慣を養うための効果的な学習方法と言えるだろう。

要するに学習課題の性質をよく理解し、それに応じた効果的な学習方法を採用することが大切なのである。

もちろん、どんな学習方法も、すべての生徒に有効であるとは限らない。生徒にはそれぞれ個性があり、効果的な学習方法も生徒によって異なるからである。だから、最適だと思う方法を実際に適用してみても、もし効果が上がらないようであれば、その方法を修正してみたり、自分に合った新しい方法を工夫したりすることが大切なのである。

さらに、友だちと学習方法について話し合い、お互いの学習方法を参考にすることも大切である。そうした話し合いは自分の個性を自覚するためのよい機会になるだけでなく、お互いの個性を尊重しつつ、共に学び支え合う、共同学習の態度と技能を育てることにつながるからである。生涯学習を推進するためには共同学習のネットワーク作りが不可欠だと言われている。その意味では、共同学習の態度と技能を育てることは、学校教育を社会教育につなげるという重要な意義を持つのではないだろうか。

新しい学力観の下での学習方法の習得

「古い学力観」の時代であれば、以上のような結論で原稿を締めくくることが許されたのかもしれない。しかし、

「新しい学力観」の下での学校の改革が進められようとしている今日、こんな浅薄な勉強法のマニュアルなどは通用しないであろう。「新しい学力観」で提唱されている「学力」とは、「生きる力」としての学力である。だとすれば、勉強法とは「いかに生きるか」ということであり、本来、マニュアルを示せるような種類のものではないのである。

時代が変わり、社会が変わり、今、学校も変わろうとしている。しかも、その変化は、産業革命以来の歴史の節目で生じている変化であり、環境、情報、人権、国際化など現代社会が抱える諸問題とも通底する、きわめて本質的な変化なのである。親も教師も、早くそのことに気づくべきである。今度ばかりは、「本音と建前を上手に使い分けて嵐が過ぎ去るのを待てばよい」というような、そんなその場しのぎの対応は許されない。冒頭の教育心理学者の言葉にみじくも述べられているように、今まさに教師の意識改革が求められているのである。

では、何についての意識をどのように改革すればよいのだろうか。述べたいことは多々あるが、もはや紙面が尽きてしまったので、次の一点だけを述べさせて頂くことにする。

それは、「本当の学力とは正解が一つとは限らない（正

解がないかもしれない）問題に取り組むときに必要となる力なのではないか」ということである。ところが日本の学校教育では、「正解が一つしかない問題」を正確に速く解くための集中的思考力の方が一つの問題から多数の答えを創出するための拡散的思考力よりも重視されてきた。もちろん、集中的思考力が全く不必要だと言っているのではない。例えば事務処理をてきぱきと効率的にこなすためには集中的思考力が不可欠である。しかし、我々が人生において遭遇する問題のほとんどは、いくつもの答えが可能であり、どれが正解であるのかわからないことの方が多い（それが簡単にわかるような問題は、本来「問題」と呼ぶべきではないのかもしれない）。しかも、「この問題は難しそうだから後回しにしよう」という具合にパスすることが許されない問題ばかりである。だから、「学力とは生きる力である」とする新しい学力観の下では、そのような本来の意味での「問題に取り組む力」の教育こそがなされるべきなのである。

以前、アメリカの理科教育では「ブラックボックス」という教材が用いられている、という話を聞いたことがある。この教材では、例えば生徒に一個の箱を示す。よく見ると箱の一つの面から向かい側の面に向かって一本の棒が

突き抜けている。ところが、一方の棒の端を手で箱の中に押し込むと、不思議なことに反対側の棒も箱の中に引っ込んでしまう。このようにして生徒の好奇心をかき立てた後で、箱の中がどんな仕掛けになっているのかを生徒に話し合わせるのである。もちろん様々な答えが可能であり、どの答えが正解であるかということよりも、様々なアイデアを創出させることによって拡散的思考力を育てようというのがこの教材の狙いである。私は別に学校を「お笑い頭の体操」の世界にしようと言っているのではない。ただ、問題解決能力を育てるためには、集中的思考力と拡散的思考力のバランスのとれた教育が大切だと言いたいのである。

また、本来の意味での「問題に取り組む力」とは、知・情・意の総合力である。したがって、そうした真の問題解決能力を育てるためには、知性を感性、感情、意志力と結びつけることが大切であり、学校での学習活動を日常世界での具体的な生活体験と結びつける配慮も欠かせない。

さらに、個と個を結ぶ共同学習の中で他者と視点を交流させることも、柔軟な知性を育てるための不可欠な条件である。

最初に、「勉強法を習得することが学習意欲を高めることにつながるか?」という問いに対し条件つきで

「YES」と答えたが、それは、「勉強法」がそうした多様なネットワークの中で豊かな「問題解決の教育」を通じて習得された場合に限り「YES」である、ということに他ならない。
(広島大学教授)

【参考文献】

若き認知心理学者の会『認知心理学者教育を語る』北大路書房、一九九三

北尾倫彦『新しい学力観を生かす先生』図書文化、一九九三

北尾倫彦(編)『自己教育の心理学』有斐閣、一九九四

